

令和8年度福井県立金津高等学校 学校評価総合シート

項目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
1 教育課程・ 学習支援 〔教務部〕	生徒が目的意識を持ち、自ら課題を探究し、主体的・協働的に学ぶ態度の育成に努める。	①主体性・自立心・探究心を育てるために、他者と協働して学びを深め、コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力を高める学習の充実を図る。	教職員は、生徒が主体的・協働的に学ぶ授業作りに積極的に取り組んでいる。 生徒は、いずれの学年も授業の中で自分の意見をまとめ伝えることがしっかりとできていると感じている生徒が多い。ただ、6年度と比較して7年度は、「できている」と回答する1、2年生の割合がやや減少した。	【取組指標】 主体性・自立心・探究心が育つ授業作りに積極的に取り組む。	日々の授業の中で、生徒が主体的・協働的に学ぶ授業作りに A：積極的に取り組んでいる。 B：ある程度取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：取り組んでいない。	A＋Bの合計が95％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A＋Bの合計が95％以上			
				【成果指標】 日々の授業の取組について把握する。		A＋Bの合計が90％未満の場合は、説明の方法を検討する。	生徒
				【目標指数】 A＋Bの合計が90％以上			
		②学習支援アプリ等を活用し、生徒が目的意識を持ち、自主的・自立的に学習時間や環境を調整する力を育成する。	ほとんどの教職員が、学習支援アプリを活用し、生徒が目的意識を持って自主的・自立的に取り組むことができるよう働きかけられている。しかし、一部の教員が十分に活用できていないと考えている。 7年度の調査では、生徒全体では目標指数を上回ったが、1年生が0.7%下回った。特に学習支援アプリに不慣れな1年生への支援が必要である。 保護者（特に1、2年）は子どもの主体的な学習に対する評価について十分に満足しているとはいえない。	【取組指標】 目的意識を持ち取り組むことができるよう内容を工夫する。	生徒が日々の生活の中で、Google ClassroomやClassiなどの学習支援アプリを活用し、目的意識を持ち、自主的・自立的に学習に取り組むことができるよう A：積極的に働きかけられている。 B：ある程度働きかけられている。 C：あまり働きかけしていない。 D：働きかけしていない。	A＋Bの合計が85％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A＋Bの合計が85％以上			
				【成果指標】 日々の取組状況について把握する。	私は、日々の生活の中で、Google ClassroomやClassiなどを活用し、学習時間を確保し、学習環境を整えることが A：できている。 B：ある程度できている。 C：あまりできていない。 D：できていない。	A＋Bの合計が80％未満の場合は、取組体制、指導方法を検討する。	生徒
				【目標指数】 A＋Bの合計が80％以上			
				【満足度指標】 子どもの学習に対する取組を保護者の視点から把握する。	子どもは主体的に学習に A：取り組んでいると思う。 B：ある程度取り組んでいると思う。 C：取り組んでいないと思う。 D：わからない（判断できない）。	A＋Bの合計が80％未満の場合は、家庭との連携を強めるとともに、改善策を検討する。	保護者
				【目標指数】 A＋Bの合計が80％以上			

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的 取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
2 生徒支援 〔生徒 支援部〕	特別活動や部活動の活性化を図り、豊かな人間性と自主的・実践的態度の育成に努める。	①生徒会、生活委員の主体的な啓蒙活動により、挨拶の励行、時間厳守、身だしなみなどの基本的生活態度を育成する。	生徒会や生活委員の啓蒙活動などとおして、挨拶に代表される基本的生活態度が身に付いている生徒の割合は高い。生徒一人ひとりが意義を自覚し、さらに積極的に場に応じた挨拶が学校外においてもできるよう、様々な機会をとおして支援を継続していく。また、時間厳守や身だしなみなど、ルールやマナーを積極的に守ろうという態度を育成する。	【取組指標】 生徒をはじめ学校内外の方々への挨拶を積極的に行う。	生徒をはじめ学校内外の方々への挨拶を A：積極的に行っている。 B：ある程度行っている。 C：あまり積極的には行っていない。 D：行っていない。	A＋Bの合計が９０％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A＋Bの合計が９５％以上			
				【成果指標】 先生や友人をはじめ学校内外の方々への挨拶を積極的に行う。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が９５％以上			
				【満足度指標】 進んで挨拶ができる。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が９０％以上			
		②学校行事やクラス活動、部活動などに積極的に取り組むとともに、各取組を生徒自身が管理運営できるよう支援することで、生徒の主体的な態度を育成し、リーダーを中心とした望ましい集団の形成を支援する。	多くの生徒が自主的・意欲的に学校行事や部活動に取り組んでいるが、リーダーシップを発揮しながら集団をまとめる力および積極的に自己発信をする力に欠ける傾向が見られる。生徒自身が役割を主体的、積極的に担い、その責任を他者と協力して果たすことと同時に、リーダーシップを発揮し、積極的な自己発信ができる生徒の育成および環境作りを心がける。	【取組指標】 生徒が個々の役割・責任を主体的に果たせるよう支援する。	生徒の主体的な活動と望ましい集団形成を A：積極的に支援している。 B：ある程度支援している。 C：あまり支援していない。 D：支援していない。	A＋Bの合計が９０％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A＋Bの合計が９０％以上			
				【成果指標】 自分の役割を積極的かつ主体的に行なう。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が９０％以上			
				【満足度指標】 子どもは、学校行事・部活動等に主体的・積極的に参加する。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が９０％以上			
		③生徒面談、アンケートによる情報収集を定期的に行い、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に対する教職員の意識をさらに高める。	すべての教職員がいじめ問題について正しい認識と理解のもとで、日々の教育活動をさらに組織的に進めていく。	【取組指標】 いじめの未然防止、早期発見、早期解決に対して高い意識を持って取り組む。	いじめの未然防止、早期発見、早期解決に対し高い意識をもって A：十分に取り組んでいる。 B：ある程度取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：ほとんど取り組んでいない。	A＋Bの合計が１００％未満の場合は、改善策等を検討する。	教職員
				【目標指数】 A＋Bの合計が１００％			

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的 取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
2 生徒支援 〔生徒 支援部〕	特別活動や 部活動の活 性 化 を 図 り、豊かな 人間性と主 体的に活動 する態度の 育成に努め る。	③生徒面談、アンケート による情報収集を定 期的に行い、いじめの 未然防止、早期発見、 早期解決に対する教 職員の意識をさらに 高める。	いじめ問題について正し い認識と理解のもとで、日々 の教育活動を進め、生徒が悩 みを相談しやすい環境を整 える。	【成果指標】 いじめなどがなく、安全で安心な学校 生活を送ることができている。	いじめなどがなく、安全で安心な学校生活を送る ことが A：できている。 B：おおむねできている。 C：あまりできていない。 D：ほとんどできていない。	教職員と同じ	生徒
				【目標指数】 A＋Bの合計が１００％			
				【満足度指標】 子どもはいじめなどがなく、安全で安 心な学校生活を送ることができてい る。	子どもはいじめなどがなく、安全で安心な学校生活を送る ことが A：できている。 B：おおむねできている。 C：あまりできていない。 D：ほとんどできていない。	教職員と同じ	保護者
				【目標指数】 A＋Bの合計が１００％			

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的 取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
3 進路支援 〔進路 支援部〕	適切な情報提供によって生徒の進路意識の高揚を図り、地域との関わりを意識しながら自らの人生を主体的に切り開く態度の育成に努める。	①進路行事の企画や模試の実施・分析・フィードバックを行い、主体的な進路選択ができる力を育むとともに進路意識の高揚を図る。	教職員は進路支援に関することを積極的にしており、生徒も補習や講座および模擬試験を自らの学力向上に役立てている。一方、保護者の満足度が目標指数（90％）をやや下回った。生徒の平均値は昨年度を上回っており、両者の意識に乖離が見られる。土曜補習の廃止および1、2年生対象夏期補習の日数減が、保護者の満足度に影響を与えている可能性がある。	【取組指標】 補習等を計画的に実施し、模試の分析とフィードバックを行うことで生徒の学力向上につなげる。	補習の実施や模試分析の活用等、進路支援に関することを A：積極的にやっている。 B：ある程度取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：全く取り組んでいない。	A+Bの合計が90％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A+Bの合計が90％以上			
				【成果指標】 補習や大学入試対策講座等に参加し、模試を活用することで学力の向上を図る。			
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
				【満足度指標】 補習や講座、模試の活用等、生徒の学力向上のための取組が十分に行われている。			
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
		②「金高進路通信」および「進路だより保護者版」の発行、研修会の実施等を通じて、生徒・保護者に適切な進路情報を提供する。	教職員は生徒への情報提供を積極的に行い、生徒も情報を十分活用している。一方、保護者の満足度が目標指数（80％）を下回った。これは、昨年度より4.2％低下した値である。特に1、2年生保護者の満足度がそれぞれ70％台と比較的低い。保護者の満足度の低下は昨年度に引き続き起きている現象であり、紙媒体をやめてHPのみでの伝達になったことが影響している可能性がある。	【取組指標】 生徒の志望を把握し、適切なガイダンスや情報提供を行う。	進路に関するガイダンスや情報提供を、生徒や保護者に A：積極的にやっている。 B：おおむね行っている。 C：あまり行っていない。 D：全く行っていない。	A+Bの合計が90％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A+Bの合計が90％以上			
				【成果指標】 生徒一人ひとりが自分の進路について主体的・積極的に考える。			
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
				【満足度指標】 進路情報の提供を十分に受けている。			
				【目標指数】 A+Bの合計が75％以上			
				【取組指標】 補習や大学入試対策講座等への参加や、模擬試験の活用は A：学力の向上に十分役に立った。 B：学力の向上におおむね役に立った。 C：学力の向上にあまり役に立たなかった。 D：学力の向上に全く役に立たなかった。	金津高校では補習や大学入試対策講座、模試の活用等、学力向上や進路支援に関する取組が A：十分に行われていると思う。 B：おおむね行われていると思う。 C：やや不十分であると思う。 D：非常に不十分であると思う。 E：わからない	A+Bの合計が85％未満の場合は、取組体制を検討する。	保護者
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
				【成果指標】 生徒一人ひとりが自分の進路について主体的・積極的に考える。			
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
				【満足度指標】 進路情報の提供を十分に受けている。			
				【目標指数】 A+Bの合計が75％以上			
				【取組指標】 生徒の志望を把握し、適切なガイダンスや情報提供を行う。	進路に関するガイダンスや情報提供を、生徒や保護者に A：積極的にやっている。 B：おおむね行っている。 C：あまり行っていない。 D：全く行っていない。	A+Bの合計が90％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A+Bの合計が90％以上			
				【成果指標】 生徒一人ひとりが自分の進路について主体的・積極的に考える。			
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
				【満足度指標】 進路情報の提供を十分に受けている。			
				【目標指数】 A+Bの合計が75％以上			
				【取組指標】 補習や大学入試対策講座等に参加し、模試を活用することで学力の向上を図る。	金津高校では補習や大学入試対策講座、模試の活用等、学力向上や進路支援に関する取組が A：十分に行われていると思う。 B：おおむね行われていると思う。 C：やや不十分であると思う。 D：非常に不十分であると思う。 E：わからない	A+Bの合計が85％未満の場合は、取組体制を検討する。	保護者
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
				【成果指標】 生徒一人ひとりが自分の進路について主体的・積極的に考える。			
				【目標指数】 A+Bの合計が85％以上			
				【満足度指標】 進路情報の提供を十分に受けている。			
				【目標指数】 A+Bの合計が75％以上			

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
4 中高一貫教育 (中高一貫教育)	中高連携 クラスの生徒の課題発見・解決能力を育成するため、探究活動の機会を充実させ、その内容や取組について積極的に広報する。	①連携クラスの中学3年生および高校1年生の、課題発見・解決能力を育成するため、校外のアドバイザーの協力を得て、課題探究に関する研修を行う。	連携クラス中学3年生については、探究活動への取組により、課題発見・解決能力が身についたと感じることができたと回答する割合は高く、中高一貫の実践活動に対する満足度も高かった。 連携クラス高校1年生については、探究活動において中学3年次に身につけた能力を活用し、さらに伸ばすことができていると回答した生徒は多いが、約14%の生徒は「活用できていない」と感じている。中学校での実践を、高校でも生かす視点を自覚させる工夫が必要である。 中高一貫教育の実践内容について、連携中学校関係教員の満足度は高かった。	【成果指標】 探究活動の成果について、中3生の視点から把握する。	探究活動（サマーハイスクール、ウインターハイスクール、探究講座など）に積極的に取り組み、課題発見・解決能力が A：十分身についた。 B：ある程度身についた。 C：あまり身につかなかった。 D：ほとんど身につかなかった。	A+Bの合計が90%未満の場合は、改善策を検討する。	連携中学校 連携クラス 3年生徒
				【目標指数】 A+Bの合計が90%以上			
				【成果指標】 探究活動をはじめとする中高一貫教育の取組について、中3生の視点から把握する。	中高一貫教育の実践（サマーハイスクール・ウインターハイスクール、探究講座など）に A：満足している。 B：ある程度満足している。 C：あまり満足していない。 D：ほとんど満足していない。	A+Bの合計が90%未満の場合は、改善策を検討する。	連携中学校 連携クラス 3年生徒
				【目標指数】 A+Bの合計が90%以上			
				【成果指標】 探究活動の成果について、高1生の視点から把握する。	探究活動（探究講座、企業訪問、「探究I」など）において、中学3年次に身につけた課題発見・解決能力を A：大いに活用し、さらに能力を伸ばすことができた。 B：活用し、ある程度能力を伸ばすことができた。 C：あまり活用できなかった。 D：ほとんど活用できなかった。	A+Bの合計が80%未満の場合は、改善策を検討する。	連携クラス 高校1年生徒
				【目標指数】 A+Bの合計が80%以上			
				【満足度指標】 探究活動をはじめとする中高一貫教育の取組について、中学校の教員の視点から把握する。	中高一貫教育の実践（サマーハイスクール・ウインターハイスクール・如月ハイスクール、探究講座、入学直前研修など）の内容は A：適切である。 B：ほぼ適切である。 C：やや不適切である。 D：不適切である。	A+Bの合計が90%未満の場合は、改善策を検討する。	連携中学校 関係教員
				【目標指数】 A+Bの合計が90%以上			
		②中高連携に関する事業内容や取組について、ホームページや広報紙等を活用して積極的に広報する。	連携中学校関係教員、保護者はいずれも中高連携に関する広報活動に対する満足度は高いが、保護者の中の一部で「やや不適切である」という回答もあった。保護者の意見も参考にしながら、事業内容や取組がよりわかりやすくなるように改善する必要がある。	【成果指標】 中高一貫教育の情報公開について、中学校の教員の視点から把握する。	中高連携に関する事業内容や取組についての広報活動（ホームページや広報紙等）は A：適切である。 B：ほぼ適切である。 C：やや不適切である。 D：不適切である。	A+Bの合計が90%未満の場合は、改善策を検討する。	連携中学校 関係職員
				【目標指数】 A+Bの合計が90%以上			
				【成果指標】 中高一貫教育の情報公開について、保護者の視点から把握する。	中高連携に関する事業内容や取組についての広報活動（ホームページや広報紙等）は A：適切である。 B：ほぼ適切である。 C：やや不適切である。 D：不適切である。	A+Bの合計が90%未満の場合は、改善策を検討する。	連携中学校 連携クラス 保護者
				【目標指数】 A+Bの合計が90%以上			

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的 取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
5 保健管理 〔保健部〕	健全な心身を育む生活習慣の確立、美化・環境保護に対する意識向上、および気がかりな生徒の把握とその支援に努める。	①家庭と連携し、生徒が健康・体調管理に関する必要な情報を得て、自身の状況を踏まえながら適切な行動を選択できる力を育成する。	学校全体での日常的な健康管理は一定程度定着しているものの、生徒自身が熱中症や感染症等について正しい情報を得て、自らの健康状態を把握し、行動や生活を調整する力は十分とはいえない。 また、教員は心身の健康に特別な配慮を要する生徒に対して日常的に目を配るとともに、家庭との連携や教員間での情報共有・共通認識をさらに深めていく必要がある。	【取組指標】 家庭や保健室・教育相談係と連携し、心身の健康に配慮が必要な生徒の把握と対応に努める。	クラスの生徒の心身の健康管理に A：積極的に取り組んでいる。 B：ある程度取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：取り組んでいない。	A＋Bの合計が 90％未満の場合は、改善策を検討する。	教職員 (クラス担任・副担任)
				【目標指数】 A＋Bの合計が90％以上			
				【成果指標】 心身の健康について自己管理をする。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が80％以上			
				【満足度指標】 子どもは家庭でも心身の健康管理に努めている。			
		②美化委員会による環境チェックなどを通して、生徒一人ひとりが考え、振り返りながら主体的に環境美化に取り組む力を育成する。	生徒は清掃活動に真面目に取り組んでいるが、教員の指示に従う受動的な清掃にとどまりがちである。そのため、清掃方法や重点項目を明確に示しつつ、生徒一人ひとりの美化意識を高め、主体的に清掃活動に取り組む態度を育成することが課題である。 あわせて、校舎を清潔に保ち、大切に使用しようとする意識を育て、自らの生活環境を整えようとする姿勢の定着を図る必要がある。	【取組指標】 生徒の美化意識を高めるために、生徒に適切な支援を行う。	暑さ指数や感染症予防などについての情報を得ながら自分の健康状態を意識し、それに応じて自分の生活や行動を A：しっかり調整している。 B：ある程度調整している。 C：あまり調整していない。 D：調整していない。 子どもは家庭で心身の健康管理を A：しっかり行っていると思う。 B：ある程度行っていると思う。 C：あまり行っていないと思う。 D：全く行っていないと思う。 E：わからない（判断できない）。	A＋Bの合計が 80％未満の場合は、改善策を検討する。	生徒
				【目標指数】 A＋Bの合計が90％以上			
				【取組指標】 生徒の美化意識を高めるために、生徒に適切な支援を行う。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が80％以上			
				【成果指標】 校舎をきれいに保つ。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が80％以上			
				【満足度指標】 子どもは、自分の生活環境を整えようと努力している。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が75％以上			
		③教員対象の研修会等を通して、気がかりな生徒について	生徒の悩みは多様化・複雑化しており、個々の教員による対応だけでは十分とはい	【取組指標】 生徒一人ひとりに対する理解と支援に努め、スキルアップを図る。	生徒に対する理解と支援に努め、スキルアップを A：十分に行っている。 B：ある程度行っている。	A＋Bの合計が 100％未満の場合は、改善策を検討す	教職員

		の理解を深め、定期的な調査等で気がかりな生徒を把握し、確実に支援する。	えない状況が見られる。そのため、各教員が日常的な生徒理解と適切な支援に努めるとともに、教員間で情報を共有し、共通認識のもとで組織的に連携を図る必要がある。	【目標指数】 A + B の合計が 1 0 0 %	C : あまり行っていない。 D : 行っていない。	る。	
				【満足度指標】 不安なことや悩みがある場合に相談できる人がいる。	不安なことや悩みがあるときに相談できる人が (校内・校外問わず) A : 何人かいる。 B : 1 人いる。 C : いない。	A + B の合計が 9 0 %未満の場合は、 改善策を検討する。	生徒
				【目標指数】 A + B の合計が 9 0 %以上			

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
6 開かれた 学校づくり 〔図書 渉外部〕	学 校 と 保 護 者 ・ 地 域 社 会 との連携の強化および本校 の特色のある 教育活動の広報に努める。	P T A 便りやホームページを通して、本校の特色のある教育の取組がわかりやすいものになるように内容を充実させ、積極的に広報するとともに、保護者や地域社会と連携した活動を充実させる。	PTA広報誌や学校ホームページを活用し、学校教育およびPTA活動の情報を定期的に発信している。 今後は、行事などで生徒の努力が垣間見えるような内容を精選し、活動の背景にある思いが伝わるような情報の発信に努めていく。	【成果指標】 P T A だよりやホームページをとおして、学校教育活動やP T A 活動の様子がわかったとする人数の増加を図る。 【目標指数】 A + B の合計が 8 5 %以上	P T A だよりやホームページにより、本校の教育活動やP T A 活動の様子が A : よくわかった。 B : ある程度わかった。 C : あまりわからなかった。 D : わからなかった。	A + B の合計が 8 5 %未満の場合は、 改善策を検討する。	保護者

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
7 読書支援 〔図書 渉外部〕	学校図書館 の環境整備 を図り、資料 活用の促進 および読書 活動の充実に 努める。	①朝読書をはじめとした読書活動に主体的に取り組むことができるように支援し、読書マナーの向上や図書室の利用促進を図る。	本校は令和5年度に文部科学省から「読書活動優秀実践校」として表彰されるなど、朝読書を中心とした読書活動に積極的に取り組み、一定の成果をあげている。 今後はこの土壌を活かし、生徒自らが読書の価値を見出し、主体的に本を手取る環境づくりを目指す。具体的には、学級文庫の拡充や図書委員会の主体的な運営を支援するとともに、オリエンテーションの充実を図ることで、図書館利用の促進と利用マナーの定着を図る。	【取組指標】 朝読書や読書のすすめについて指導する。	朝読書や図書室の利用、読書のすすめについて A：積極的に支援している。 B：必要に応じて支援している。 C：あまり支援していない。 D：支援していない。	A+Bの合計が 90%未満の場合は、 改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A+Bの合計が90%以上			
				【成果指標】 朝読書をはじめとする読書活動に積極的に取り組む。	朝読書をはじめとする読書活動に積極的に A：取り組んでいる。 B：ある程度取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：取り組んでいない。	A+Bの合計が 85%未満の場合は、 改善策を検討する。	生徒
				【目標指数】 A+Bの合計が85%以上			
		②生徒のニーズを把握し、魅力ある図書および資料の充実と利用環境の整備を進める。	令和7年度の貸出実績は停滞しており、情報媒体の多様化（SNS等）が読書時間に影響を及ぼしていると考えられる。 この状況を変えるため、需要に即した配架（魅力ある本の整備）と読書機会の多様化（電子書籍の活用啓発等）を推進する。生徒の潜在的なニーズを掘り起こし、読書活動の活性化を進めていく。	【満足度指標】 朝読書をはじめとする読書習慣についての保護者の見方を把握する。	朝読書をはじめとする読書活動は、子どもの読書習慣の形成や知見を深めることに A：効果があると思う。 B：ある程度効果があると思う。 C：あまり効果はないと思う。 D：効果がないと思う。	A+Bの合計が 80%未満の場合は、 改善策を検討する。	保護者
				【目標指数】 A+Bの合計が80%以上			
				【取組指標】 図書の購入について相談や要求を受けやすくする。	生徒のニーズに合った選書と本の要求について A：取り組んでいる。 B：ある程度取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：取り組んでいない。	A+Bの合計が 80%未満の場合は、 改善策を検討する。	教職員
				【目標指数】 A+Bの合計が80%以上			
				【成果指標】 図書館や学級文庫の本を充実させ、多様な読書の機会を啓発する	図書館や図書室の本が充実し、図書館を利用しやすい環境（検索・予約・リクエスト）が A：よく整っている。 B：ある程度整っている。 C：あまり整っていない。 D：整っていない。	A+Bの合計が 80%未満の場合は、 改善策を検討する。	生徒
				【目標指数】 A+Bの合計が80%以上			

項 目 〔校務分掌〕	重点目標	具体的取組	現状と課題	評価の観点・目標指数	判断基準	判定基準	回答者
8 探究支援・情報支援 (探究支援室)	生徒が課題探究に主体的に取り組めるよう、ICT活用やデータサイエンスに基づく分析・解決能力を磨き、批判的・協働的・創造的思考力の育成を通して、新たな価値を共創し自走できる諸能力を醸成する。	①ICT機器やデータサイエンスを活用して自らの仮説を論理的に検証し、その結果をもとに次の活動を自らマネジメントできるようにするために、ICT機器の効果的な活用を促す活動を設定する。	1人1台端末の活用は日常化しており、情報収集や資料作成は円滑に行われているが、収集したデータを多角的に分析することには個人差が見られる。今後は、データを単なる事実提示で終わらせず、客観的な根拠に基づいて計画を修正・実行できる力を高める支援が求められる。	【取組指標】 ICT機器やデータを活用して自分の考え（仮説）を確かめる活動を設定し、生徒が自身の状況を振り返りながら計画的に探究を進められるよう、助言や支援を行う。	ICT機器やデータを活用して自分の考え（仮説）を確かめる活動を設定し、生徒が計画を立てて探究を進められるように、 A：積極的に声をかけ、生徒が自ら見通しを持って活動を進められるよう促している。 B：状況を見守りながら助言し、生徒が計画に沿って活動を進められるよう支援している。 C：おおむね進捗を確認しているが、助言は十分にできていない。 D：確認が十分にできていない。	A＋Bの合計が80%未満の場合は、改善策を検討する。	教 職 員 (探究の授業担当者)
				【目標指数】 A＋Bの合計が80%以上			
				【成果指標】 探究活動において、ICT機器やデータを活用することで、自分の考え（仮説）を確かめたり、計画を立てて進めたりして、自身の成長を実感することができる。			
		②事象の背景にある課題を多角的な視点で捉え、自ら問いを深められるようにするために、批判的思考を促す場面を設定する。	探究活動に対して真面目に取り組む姿勢は定着しているものの、既存の情報や先行事例をそのまま受け入れる傾向があり、事象の背景にある課題を多角的な視点で捉え、「なぜそうなるのか」という独自の問いを深められるようにするための「批判的思考」が十分とは言えない。情報の正しさを吟味できるよう、教員側からの意図的な問いかけを強化する必要がある。	【目標指数】 A＋Bの合計が80%以上	探究活動において、ICT機器やデータを活用することで、自分の考え（仮説）を確かめたり、計画を立てて進めたりして、自身の成長を実感することができる。 A：多くの場面で、自分の考えを深めたり計画的に進めたりできた実感を持っている。 B：特定の場面で、自分の考えを深めたり計画的に進めたりできた実感を持っている。 C：ICT機器の使用や計画の立案はしたが、成長の実感までは持てていない。 D：ICT機器の活用や、計画を立てて進めることがほとんどできなかった。	A＋Bの合計が80%未満の場合は、改善策を検討する。	生徒
				【取組指標】 事象の背景にある課題を多角的な視点で捉え、批判的思考を促す問いかけや助言などの支援を行う。			
				【目標指数】 A＋Bの合計が65%以上			
				【成果指標】 事象の背景にある課題を多角的な視点で捉え、批判的思考を行い、自ら問いを深めることができる。	事象の背景にある課題を多角的な視点で捉え、問いを深められるよう、 A：多くの場面で、批判的思考を促すための問いかけや助言などの支援を行っている。 B：特定の場面で、批判的思考を促すための問いかけや助言などの支援を行っている。 C：批判的思考を促すための問いかけや助言などの支援を十分に行えなかった。 ※「批判的思考」：情報をそのまま受け取らず、本当に正しいか論理的に判断すること	A＋Bの合計が65%未満の場合は、改善策を検討する。	教 職 員 (探究の授業担当者)
				【目標指数】 A＋Bの合計が65%以上			
				【成果指標】 物事の背景にある課題を多角的な視点で捉え、 A：批判的思考を行い、自分なりの問いを深めようとする。取り組んだ。 B：批判的思考を行うよう、意識して取り組んだ。 C：批判的思考を行わなかった。 ※「批判的思考」：情報をそのまま受け取らず、本当に正しいか論理的に判断すること			

		③多様な他者との対話を通して互いの強みを引き出し、新たな価値を共に創り出せるようにするために、協働的・創造的思考を促す場面を設定する。	グループ内での協力体制や活発な意見交換は見られるが、互いの強みを引き出し合い、自分一人では到達できない新しいアイデアや解決策を形にする「価値共創」のレベルには至っていないケースが多い。単なる役割分担による協調活動に留まらず、対話を通じて相乗効果を生み出す協働的・創造的思考を促す仕掛け作りが重要である。	多様な他者との対話を通して互いの強みを引き出し、新たな価値を共に創り出せるよう、協働的思考や創造的思考を促す場面を設定し、対話を活性化させる働きかけを行う。 【目標指数】 A + B の合計が65%以上	多様な他者との対話を通して互いの強みを引き出し、新たな価値を共に創り出せるように、協働的・創造的思考を促す場面を設定し、 A：グループ活動などの対話が適切に進むよう支援することで、生徒が自分一人では得られない気づきを得られるよう促している。 B：グループ活動を通し、協力して活動を進められるよう見守りや進捗の確認を行っている。 C：対話や協働を促したり、新しい価値を生み出したりするための働きかけが、十分には行えていない。 ※「協働的思考」：多様な他者を尊重した対話を重視する考え ※「創造的思考」：新しい解決策の考案	A + B の合計が65%未満の場合は、改善策を検討する。	教職員 (探究の授業担当者)
				【成果指標】 他者との対話や協働を通して、自分一人では思いつかなかった新しいアイデアや解決策を見つけ、新たな価値を共に創り出すことができる。 【目標指数】 A + B の合計が65%以上	他者との協働を通して、 A：自分一人では思いつかなかった新しいアイデアや解決策を見つけ、納得のいく形でまとめることができた。 B：他者の意見を聞くことはできたが、新しいアイデアや解決策を見つけるまでには至らなかった。 C：他者との協働の機会が少なく、自分一人の考えだけで進めてしまった。 ※「協働」：多様な他者を尊重し、対話を通して互いの強みを引き出しながら活動しようとするこ	A + B の合計が65%未満の場合は、改善策を検討する。	生徒